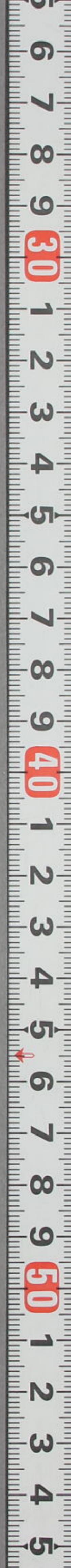




茗會文談

四

1 卷 5
489
4





茗會文談卷之四

目錄

- ① 經典
- ② 文字
- ③ 先祖
- ④ 病源
- ⑤ 神祇
- ⑥ 壬ろかふのんの字
- ⑦ 小笠原楓庵

八 夏祭

九 奇石

十 一坪二坪

十一 費陰禪師

十二 戒定憲

十三 細

十四 釣針

十五 三子を産む

十六 シヤチホコ

十七 伊勢のいみ詞

十八 伊皿子の麩

十九 全浙兵制

二十 神祠

廿一 祐乘彫物

廿二 因果應報

廿三 四聲

廿四 北山黄公

茗會文談卷之四

錦城 大田元貞才佐 著

① 經典

余が先人の玉ひしは唐土より經典の渡りしこ  
そ應神天皇の御世ともいふべけれ文字の來り  
しハ是より先何れの時ふらん知るべからずと  
ふり余此説をのべて思ふは朝廷より聘唐使を  
遣はされまた唐土の天子よりも使の來りしこ  
と垂仁天皇の御宇は始りけめされ日本紀も志

るさる、所ふりもろあしの史は漢の時日本の使の来りしをちを志しとり況や下々にて私にたがひに往來せしハ昔よりあるべし人皇第七代孝靈天皇七十二年ハもろろし秦始皇二十八年ふり此とき齊國の賢者ハ徐福といふ人あり

福を史記ハ市ハ作る福と同字也

始皇の暴虐をよみ日本のがれ来る日本の内いづれの國へ着船しけるもやいづれも土

地沃饒にて風氣山川齊ともおあじけれど神代に近き時ふれば人民ハすくふらふべし

徐福是より思ひより又もろろしハゆき始皇の仙術ハあひし時ふれば折れそおもひいつたり上書し海中ハ三つの神山あり名付て蓬萊方丈瀛洲といふ仙人是ハ居る望みこふ齋戒して童男童女七千人ハ是を求むることを得んともろろし上り始皇よろこび童男童女各千人をおろし海中ハ行て仙人を求めしむと史記ハ見

えとり徐福市童男童女をつれ日本に來りすみ  
終りもろこしに歸らず史記に始皇は徐福等  
を遣すは億方の財宝を費すは不死の薬を得て  
かへらすといわれけり

徐福是より日本まで村里をうまへ始皇の所へ  
へける財宝はて万のものをつくり捧らへ童男  
童女の成長すは儘は夫婦を繁昌にけるあり  
此時定めて六經を持ちより元より文字をも教  
へひろめしむ

欽明天皇の御時秦漢の人口を固々に分ち遣は  
さる秦人の戸數七千五百三戸もあり是等徐  
福がつれ來りし男女の子孫ありし皆秦人  
もろこし秦をもつて姓をせり

漢人の來りしは王莽が乱をさけしあらん  
秦をはとせり漢をよせしはとあり  
何れも他國の人あり故にあやむ文あり  
もろこし文化あり

徐福は後紀の國に移りけるもや熊野は徐福が

祠ありといふ僧空<sup>絶</sup>海々明の太宗の前みて詩を  
作りて熊野峯前徐福社満山藝草兩餘肥タリと  
いふり又千百年眼は葉公春ら疏を引ていふ徐  
福多載珍宝國史至海島得平原大澤止吐不歸今  
倭其種といふり

又隋史を考ふると裴清が日本に使して来りし  
海路を記していふ都斯麻国をへて東一支の国  
に至り又竹斯の国に至り又東秦王国に至り其  
人<sup>華</sup>仲夏はあまたし又十余国を経て海岸に達す

いへり海岸といふは津の国和泉紀伊の間を  
いへるりこの秦王国といふはいつく成をくら  
がつくしより東にあまたの四国淡路あましま  
ら此国は徐福が来り止まるり王とあがりしを  
急秦王国といひしやその人華夏はわたくしを  
いふは華夏とはもろくもいふ秦人の子孫  
よて言語衣服も尚その国の風のそとくふよや  
あこもあつて思はふいし  
かゝ秦漢の人多く来れは文字は次第に廣う

へしきあきてハ神代よりこのろと馬子ガ旧事  
記を作了時まで古事来歴ともいらんをせし傳  
はらんや

其後多くの歲月をへて教ふるすもふく文章  
の道うせんよりゆきけるは應神天皇の御時百  
濟の阿直岐来り日本よ本より傳へたる經典を  
見てよくハ説きけれハ菟道稚郎子是よあらむ  
玉ひ又王仁論語千字文を持来りしを菟道の  
こころ又是を師とし玉ふ文學の道せよあもぬ

く行はれけるん

斯の如くふれハ應神天皇の御時始めて文字の  
来りしとあもへるハもたより誤りもて經典も  
是れよりえるハ先よ渡りしん

日本のとをもちろの書ありしとせしハ後漢書  
よ始まり其日本傳よ曰

自漢武帝滅朝鮮倭國譯使通於漢者三十許國  
皆稱王世傳統其大倭王居邪馬壹國

原文のまゝ、



ちありおよそもろこしの人日本のとを去りす  
ハ多クにあやまり子れぞ又元来ちきとをつく  
りていたんやうふも然れハ漢武帝の時すてよ  
使をつらたさぬしあり是よりぬろろをさく  
て漢セハいつるより

武帝の時ハ開化天皇の御時よあくる此時上神  
武天皇を去るを五百年ありけくし朝廷の政  
教よよく西方の国をけくしよくよてこづら  
ら玉七名のりて漢よ使をつらたけりせえ

とり

後世よさる事例あり足利氏の時良懐もよろす  
南朝の皇子筑紫子居て日本國主と稱し明朝を  
往來せしるもありき

こよ大倭王ハ大和國よ居るとかきければ正  
統の天子のおほしませしこてハ漢人もよくし  
ゆり日本紀を考ふるよ開化天皇の次のころぞ  
ハ崇神天皇よておほしよす聖主よて政をあら  
とめ正し四道の將軍を遣し日本國中を帰順せ

しめ玉へり是開化天皇の御時王道中ごろおと  
ろへ崇神天皇より中興し玉へる証あり又  
日本紀神功皇后摂政三十九年四十年四十二年  
の注は魏の明帝景初三年は使を魏に遣はされ  
魏主髦正始元年魏の使来り四年は又使を遣は  
され、その書を魏史を引てあると其れも  
むき今の魏史よりひかへて猶奪く書けり正  
始四年は倭國因使上表答謝恩詔とあれば  
この上表の文章おど日本人の書きとよりこれ

らよりて見れば文字の来りしとて神代より  
のそとあらんも知るへららす神武天皇の御時  
は周恵王の時とあれは神代は殷の末周の中  
頃まであるとす、其の時の文字は古文字よ  
てもろろして後世はさどろよとられずれ  
ばらの神道家は神代の文字ありといふ、もろ  
ろしの上古の殷の代の文字よてあらんも知ら  
れず

② 文字

もろこしの文字は昔これ始むるともふく漸々  
は出来るふよつしおよえ文字の始は画畫より  
おれを象形といふ耳目鼻口手足の文字皆其形  
をえりきくると蒼頡に至りて六書備はりく  
ふらん淮南子は昔蒼頡作書而天雨粟鬼夜哭  
といひ是は民苦くみ偽りのくろく出来よを

いへるふり古の文字をまことのこゝに用みずあ  
くまろても用ゆれはありまればあつてうふ  
けねと慧眼をひらき見れば文字は世の多事を  
ひらくあれは淮南子は老子の言よもちつきて  
かくいひたり百年以前は士大夫の中もても文  
字を知らぬ人ありしとそれるてもとハちひのひ  
しと猶盲人の世を渡り如し今の世は負販の  
ものも皆文字をえりさればちて昔よりちま  
事もふく余江戸に在し時匠人は備直やまひとをやりて



あらぬも理りより大人のあもをふしてちりみ  
卵をのえて産む竹の内より生れ又蜀の皇帝の  
祖に天より下りしあむいつふ、其先のちり  
ぬむ其説を神りする

④ 病根

古語に禍は口より出て病は口より入るなり  
り朝を盥ふ 此処誤脱 嗽ぐの水をおぐしやる溝

みいさ、うふるを、まれに、趾より、ちり、又  
それよかりく、を、満れに、水、外、を  
ゆき、又、さら、ま、来、る

人の病も、か、の、ど、ち、し、食物の滞り起るゆゑ  
も毒物のこみあらず、水の流れて滞らぬ、ゆゑ、  
これに、腸胃の間、す、や、う、の、健、れ、に、外邪を受  
ても早く治す、五行の説も無益、より、運氣の論も  
贅言、より、是を、さら、ま、は、人、ら、ふ、天年を、保、つ、ま  
り

⑤ 神代

神代此事ハ存いているざる限りある一けれ七  
旧事記日本紀のおもむきよよればあらく知れ  
侍り 天照大神のみるそのりして宣く瑞穂の  
國ハ我子押穗耳尊のちらすべき國ありちて遣  
はさんとし玉ふ尊のたまはくうめる所の兒を  
遣はすづく大神ありし玉ふよりて饒速日尊

すふはち河内國河上味峯に至りまし又大和國  
鳥見白山よ移りいまし長髯彦のむすめを妃そ  
し玉ふ御子をはらみ玉へるころ尊ウれ玉ふ  
大神又押穗耳尊を遣さんておぼすよ尊の御子  
瓊々杵尊生れさせ玉へば是をもて尊よ代て  
遣さんその玉ふ大神又ウれ玉ふ是旧事記よ  
のする所ありさてこの詔をの玉ひし時大神い  
づとふあはしましけるていふよ天上よ居ませ  
しえ天上て其詔を神にすよの類ありて其實ハ

筑紫の日向の國あるべし瑞穂の國を豊葦原  
中津國ともいひつり筑紫より海を隔て、東北の  
地長門の國より東をきりて中ツ國といふ  
り神武天皇の治此西偏その玉も中ツ國に對  
しての名ふり

長髯彦は、大和國の人あり是を旧事記天孫本記  
の中は中ツ國の人と云ふ。本の長髯彦と云ふ  
せり饒速日尊長髯彦がむと成玉といふば  
ふふ大和にてかかれ玉ひ中ツ國又云ふ

古く瓊々杵尊を遣さる、まれば是もまた河内  
大和のかとみねはすべきとあるは三紀にも  
は瓊々杵尊日向國にあまんどり玉ふとあるは  
大に矛盾せり

然らば日向の國へいづらよりあまんどり玉  
ふといふは神書を解する人まゝ天上よりとい  
ふあり是等の説は佛書の三十三天の説はあら  
ひて蒼々たる霜雲本の中に都ありてあはれ  
まらざるあり信するまゝとせず

抑旧事記をつくれ馬子に佛者云んば三十三  
天を信し且筑紫におはせしち云んば辺鄙ある  
を嫌ひて實に空虚中に都ありせせるるや然る  
よ之を實とせば霜雲本のよりあま下り玉は  
んよ何のまはりもふく直に中つ國より玉  
ふづしいう云んばはるく西の日向より又夫  
より路次をまの神より阻隔し玉つるを志の  
ぎて中つ國より云んちし玉ふて是不通の説ふ  
り

孝徳天皇白雉五年二月遣大唐大使大錦上高向  
玄理到于京奉觀天子於是東宮監門郭文举悉問  
日本國之地理及國神之神名皆名本隨問而答  
玄理卒於大唐也見之り玄理唐より身より  
めれば日本の事委しく唐人の物語りせしふら  
ん唐書日本傳曰其王姓阿母氏自言初王号天  
御中主至彦瀲凡三十二世皆以尊為号居筑紫  
城云々  
此筑紫といふは即日向より唐人の言ふ所ハ



証とすよよとくらぬぞ自ら言ふとあるはかの玄  
理のものうろりしけるを書きあせよあふし  
つらりていふへくもあらず神代に直指抄は天  
の浮橋の注し神代府抄を引て日向の國のあま  
うけとていふ所ありていつり其抄の實義篇は  
いはく神代よ、伊弉諾尊日向の國は皇都と  
て玉ふ是を天上と申す云々神代と申すも人代  
よとさふるあま天上と申すは神代の林檎裡より  
雲のうへあも申す心よりと書し神代抄の説の

ごとくふれば實事よあふえ侍れど普通よ人の  
信用せぬとあれば先筆をさくなくありとい  
へり

右のいへる事ともよて察すれ、此詔をの玉へ  
よ、天照大神筑紫の都よての事あり又余日向  
の飲肥の人よ尋ねしよ高千穂の峯は、天照大  
神の岩屋今に残りありと申すあり

すべて日本の風氣西方より開けより東方に國  
あく西よ、近くもろこしありと日本より早く

開けり其氣運次第に東するを見えり又  
三紀にも其の峯は天降りますとあるを某  
の峯より天降りますとよみあらためハ右の説  
よかふべけれど日本紀神武天皇の詔は高  
皇産靈尊大日靈尊の詔を瓊々杵尊あふむ  
らせ玉ふ天上より降り瓊紫に仙蹕をとめ玉  
ふて多くの年月をつ三帝に至りて始めて東征  
し玉ふやうよかきふさんより此天上をまゝ先  
のどそく佛説にあらひて見ゆハ 又とあけ

れざさるるといふまゝとあれば天照大神已前の  
御神代はさういふ所つみよ知るべからず後世  
吳太伯の事をいひ出せるも是によりてれゆひ  
合せていふるありつそ

さて此神武天皇の詔は只日本紀の上にはあり旧  
事記にあし是もまたいふくも梁書の倭國傳に  
いふ倭者自言太伯之後とありしり梁の時ハ  
日本の顯宗<sup>仁賢</sup>天皇の二帝の間とあり是も自  
らいふとあればその前日本よりもろこしに渡

リし人のかくいへるよれに天照大神を吳太伯  
と申もふるくいひあらはせり近世もろこしび  
みまの儒者のいひ出せるよにあらず

⑥ まろがふのんの字

何れの字ふるり明らかあらず通用の説ふに无  
の字といふ似て非あり昔に日本まで毛の字を  
んもよめり毛の字の中の二画をえぶきてん

とすふるり万葉集も多用ひとる中に尤疑ひ  
ふまに坊人の歌に

やそ國に難波みつとろ舟のさり

ころする日ろよ美毛比等母我母

そのまとり是見んのんに毛の字を用ひもにハ  
かへりて母の字を用ひとり歌のころハ我舟  
をかざる日を我おもふ人よ見せまほしちよ  
めるあり日ろハ只日ころに助け字ニ  
またかとうあのんの字ハ通用の説ハ半の字ハ

萬葉  
集  
卷  
之  
七  
上  
誤字  
ん

リ似て非アリムは某の字と同一老学庵筆記  
曰今人書ム以為俗然穀梁傳曰六年蔡侯鄭伯  
會于鄧范甯注云鄧ム陸德明釋文曰不知其國故  
云ム地とあり古ハ日本もて也 此字を用ひけり  
延喜式東宮式云凡十二月晦日神祇官大中臣ム  
麻呂と書せり是古の夜の事にゆ大中臣此人い  
つれありてもそり行ふよりとれと名をさ  
ずしてムえれでしとらけるにまろに男子の通稱に此ム  
の字の音正韻に謀上声とすむの声に此よ

よりておもふにかとらふのムは即某の字ホ  
リ

⑦小笠原楓庵

いつれの時何れの所よやらん小笠原楓庵とい  
ひて神道を説く人ありつねに四海困窮天祿永  
終嗚呼ひき見識あるふとへりて三輪執  
齋のものかとりありしあり近きころの儒者よ

孔子の楚より行き玉ひしに謬ありせよ用ひられ  
玉ふとも管仲の事業をよし玉ふに過ぎずとい  
ひこの頃名もしらぬ人の著せる書は秦始皇  
を寛仁の君とし其始めたる功に孔子よりよされ  
りあせいり

堯舜孔子をえり秦始をほむ邪説民を誣る  
としかるをせ申べきかの楓庵に神道者よ  
れに書經の文面を會得すまどければ七七  
りあり且この二句古注新注いづれも通し

之別論すべし

⑧夏祭

原本作宋

凡ゆるに夏祭のあるは唐の川靈會を燈觴と  
す貞觀五年五月二十日於神泉苑臨御靈會  
云命雅樂寮伶人作樂以帝近侍兒童及良家稚  
子為舞人大唐字々更書而舞 云總都邑人出入  
縱觀所謂御靈會ハ崇神天皇伊都親王菅原夫人

及觀察使橘逸勢文屋宮田麻呂等是也云每至  
夏天秋節修御靈會徃々不断令里貫子弟靚粧  
馳射旌自力之士袒裼相撲騎射星藝走馬爭舩  
倡優曼戲遞相誇競聚而觀者莫不填咽遐邇  
因循漸成風俗也此文錯誤あり  
今の夏祭に必ずあぶささことのあふも昔よりの  
あらけしあり是正祭あらぬよりしかく有け  
るあらし此風あふり甚たしくありくる也悉ま  
は同七年六月十四日禁京城七道諸人奇事御奏

會私聚徒衆馬騎射小兒聚戲不在禁限也あり今  
も大人のいそふところへくる事あるより子ど  
もあつまあせ給するあり

⑨ 奇石

表中郎集に蘇東坡いふ江陵南門外に石ありか  
とち屋根のどちし地中におち入て猶其あはる  
を見ずち多り是播磨の石の宝殿の類にして

石柳ありくま

⑩ 一坪二坪

土地をうごふるは一坪二坪といふ予思ふ又一  
畝一步とも同じ声まればまぎるゝより一  
畝ハ定まぬる声にてよこ一步ハ一をひちつと  
よこ歩はまごりてひちつばとせるあらん坪の  
字ハ只土地の平らうあるより人家の樹木を

植とる所を源氏に坪先哉といふ是つき山あら  
ぬえき庭に樹をうゝよりありこれ平地のこ  
ろこ

⑪ 費陰禪師

隱元禪師の法着来りといふこの僧中庸の費隱  
の章をよみて仏道をさとりて即名とせりと語  
り傳ふ費隱にておほうこの僧ハかくあるまじ

きは儒教の差別をとてぬに真率にて愛すべき  
心を一ある僧あり然るにこれに隱の理のこ  
を正きよへ佛の理を會得せざるより佛の理  
を會得せば圓頂方袍は安んずまふま

⑫ 戒定慧

戒定慧の三つをもて貪嗔痴の三毒を治る是  
仏法の要あるべし禪家の觀心見性もこの三つ

を修せざれば至るべからず其おもむき六門集  
おも見えたりしうれば頓語といふるは信じ  
らくし

⑬ 細

つむぎとはつむぎ絹といふより急就篇の細  
糸繭をぬき引て結して織るといふりともあ  
へる註に日本ありつむぎ後織るもつむ



ぎせいひもろく人々抽し織るゆゑ細く名づ  
んいつれも用語をもて傳ちせり又一種の山ま  
かつむぎせいひあり山谷の間まかのつうらよ  
生するまあり是をし織ぬるん出影せいひ書  
ふ此の絹五善を備ふ潔くして自然の澤あり洗  
ひても色うはらぐ常は着てやふれず華美あら  
ず又野薺あらす吉山は用ひてよきふりせり

リ  
又天蚕絲てんぐすといふものありもろくこの南方の國

より出つ一種の蚕繭ありこのまゆをほちきく  
る糸あり多く寧波の舟よのせ来る漁人鯛鱈を  
つる糸は用ひ甚たつよく水中よて水せひせし  
き色ふるゆゑ魚よく餌よつらせり

十四 釣針

釣針をちちふと神代の巻よ見えたり西國の  
方言ありてしかのてどすを釣ふはよすよに釣

針の由一ニ尺の間ハときてハ三筋を用ひ一筋  
用ひそれよりあてぬるをニすこし三筋よりあて  
つあま合せて長くすその釣針のつくてハすを  
もちもちいふ釣針の由もさるるに神代の  
言西國よりは残れり

十五 三子を産む

民間の三子を生めにあほやけよりたまにあり

り古くもあつたり唐土もあつたり 延暦二  
十年六月三河國碧海郡人漢人部千倉賣一産  
三子賜<sub>二</sub>稻三百束大同二年近江國蒲生郡秦刀自  
賣一<sub>一</sub>産<sub>二</sub>男一女賜<sub>二</sub>稻三百束此外處々に見え  
たり

越語云生三人公与之母注母乳母也と見えたり  
是皆生齒の多きをよろろむて玉ひ且養育の爲  
ありと

十六 シヤチホコ

鷓尾をちやちほこともよむ。いふは訓もあらず。湘素雜記に虫尾虫海獸より今人誤作鷓字。漢武作箱梁殿有上書者云虫尾ハ水ノ精能避火災。因置虫尾象于上。古老傳云虫簪尾出于頭上。うらの如くまねハふるとあり。来りし事ニ又是を鷓吻と云い。り日本あり。史ニ初めて見え。るハ天慶五年正月廿五日有狐登居夷福門ノ東

鷓尾上又七月<sup>年</sup>八月大極殿西鷓尾半折西落也。あり鷓ハ鷓と同し鷓尾あり。原文の七訓あり。是又いふ義を知らず。

十七 伊勢のいし詞

伊勢のいし詞は寺をたふきていふ。阿人のいふ禁裡并は諸王公卿の家もたふきていふ。古法あり。七一。つり然るは聖武紀に神龜元年大政官

奏言上古淳朴冬穴居夏巢栖後世聖人代以宮室  
亦有京師帝王為居万国所朝非是壯麗何以表德  
其板屋草舍中古遺制難宮易破空殫民財請仰有  
司令五位已上及庶人堪宮者構立瓦舍塗為赤白  
奏可也見えこれに寺のこ瓦ふきありまあら  
か

①六 伊四子麩

いさらこの麩は名産ありその故は昔天野陸五

右衛門といひし人此麩作る家の前渡りせしは  
桶の内は兩足きり入れて物をふむさましし  
男ありいぶかりて徒者しそ尋しむゆに麩をこ  
しらぬるえちいふ天野いかりて麩は佛も奉  
り貴人高僧もめすものあるは汝らがすぬめて  
いちあむまやある年あし作るをいあらぬりて  
あぬハ年うても作れを足してふちのちやまよ  
似かちいふまあしくいかり利を得んちて無礼を  
あすいふんまやつぢらうあ以後年あしつらん

足もて作らば此家を崩しほろぼさんとのいふ  
る麴家もて何つらひくしてありけるをいひて  
みゆのまゝにしてやうらうらうとて里の名ぬを  
よひ出し以後年々してつらうすこきといふ証文  
ありてありけり

是よりいさらしめ麴は清浄なりと求めうふ人  
多しとふんこの天野は天草あて戦功ありし人  
善をよほし悪をよこひとてつらうらうとありけり  
ときゆのふらうをありける

⑨ 全浙兵制

昔京都將軍の末ころ日本の不逞無頼の輩もろ  
こゝよゆきて人を殺し貨財を奪ひてる浙江  
の地最甚く害をうらむる是を倭寇といひて  
ゆらゆらの人虎狼のごとくおそれけり幸しく  
ハ明史の日本傳よりいりこのころあま 阿らんせ  
る書より

其中は日本の風俗をくまりに哥をも多くあげ  
とる内は

世の中は人に何をいはす水

すれはあるといふ神えくるとん

うくの如くはあけり

讀法

揺那之隔那許多外南尼多木以外失密辭

四密尼過而和自華密所失賴奴

却意

世中之好多人難分別如水混清唯有神識

その譯おほやうんまきとえとれ七哥の意ハ却る  
ちりいひうとるし

② 神祠

秦策は恒思有神叢注灌木中有神靈托之

墨子は建國中擇木之脩茂者以為叢位

史記は叢祠注索隱曰神祠ハ叢樹ナリ叢ハ樹木

多所ヲイフ。

是皆樹木多き所を神のあはす所とするより  
日本もまゝ然り三輪の杉をもて神のつます所  
とし哥はゆりのちの繩打をくまもあまのこ  
の類と

しうれば叢字をゆりともみてもよろしく杜の  
字を用ひてもりともむとに僧契沖の説に社の  
字の誤りせりともりともあまのこ日本紀も則ち  
社の字ともりともあり

余按するはゆりとも守り鎮守あり其所を  
守り玉ふ神のいもうちありまゆりのまを思ひ  
ゆりともあり下葉集は富士山を國のくつめ  
ともある此心あり尔疋も其國中の大山を  
鎮せり

又社の字をとろるとあり日本紀は神社とい  
ふ姓ありうろろとゆむやうろをろろとい  
ふと其義を知らず姫ろそに姫社ろそに社  
部ありとまり

(廿三) 祐乘彫物

小笠原侯の家臣何某愛せる削刀あり其柄ハ祐  
乗トヤウ人の彫る義經馬上の番よりある時  
見ぬハ義經のまゝる曹落矢とりねせりまづら  
く見ぬハ其あるも錫銅あり髪をつらぬ其上ハ  
銀あり抹額もくがくせり主人益々感し神藏せり此りハ  
七也し落矢さらありハいつましも髪はちま

まのこころニハ人不知れざるも古の名匠ハ  
う心を用ひありげきこころをくみ  
すや

(廿三) 因果應報

因果應報の説ハ西域の書の唐土ハ入来いらいらざり  
に前より始まぬり然るも余をもつて見ぬハ仏  
書来らずとも後人いひ出さし中庸よりくみ

入来りしより始まるなり  
乎



るをともせしめ 阿やまきろちを行ふ後世述る者  
阿らんよぬは是とせぢちあり又書ふしよせる  
福善禍淫の詞と心得あやまらば佛説は近うる  
へし今人財宝をもて人の窮をすらんよ其人  
後よ富て是よむらひに益々義心を生ずるも  
し不仁をししてむらふるもあつて人を救ふ心か  
ころらんや

此時因果應報あつたまさにつかけり乗除してそがわる  
心ありよへし福善禍淫よのし帰してハ 司馬遷

が伯夷傳は疑へるが如く常人にさそするところあ  
るまむ淮南子は三代の王者なひ孔子の子孫長  
久をいひて陰徳陰行は歸して是聖人を尊ぶ  
心あり説を立てるよあてゆくも然らすとて是偶  
然あり此偶然ある所は天意あるを知らんは達  
者といふへし道をしる人ハ只眼前すべき事を  
すよのころし後の志るしよ目をつけねば因果  
應報をいふよなほす

③ 四声

平上去入の四声ハ由りて子限らずいつらよ  
もあましく日本もしてはと聞のひハ平声より  
日のひハ上声なり火のひハ去声より畢竟とい  
ふ畢ハ入声あり東国の人上らるゝ人の四声を  
こつちを無益の事といひけれハ今諸侯  
の屋敷に門は紋をつらむてつらへ通すく  
らす門は紋をつらむていひしるそよけれセカん

こらひけり此門紋の声の事ハ日本の今の人の  
いふ声ニ實の声ハ門紋もよ平声よりゆもよ  
り今の唐音ではとらり上りの人四声をつひ  
こらぬもいつれり平声いつれり上声といふ  
るセハ知らずさきよつらむしきもすくも謡  
の章あていはに一ハ平声一ハ上声一ハ去声一  
入ハつめる声あり

廿四 北山黄公

文中子よ北山黄公ハ醫をよらす飲食起居を先  
らして針灸を後らすもいふ凡人々々心得  
し飲食よ心を用ひず酒色よふけり起居時あら  
ずして病む時ハ針藥をて治すべしと醫をよら  
む輩ハ多し鬼録よ名のたまりたる人ありと

茗會文談卷之四終

